〔美術館員随想〕

ワークシート作成の試みについて

先の展観「中国陶磁―花の意匠―」(2003年５月17日～７月６日)では、子どもを対象としたワークシートを作成しました（Ａ５版：図１、２、３の３種類)。展示内容に合わせたワークシートは一昨年の展観「花の美術」より不定期に制作してきましたが、大和文華館の鑑賞教育を含めた美術館教育活動はまだまだ小さな取り組みから始めたばかりで認知度も低いので、今回のワークシートの内容を中心にして少し述べさせていただきたいと思います。ここで「美術館教育」や「鑑賞教育」の言葉を用いましたが、本来は「教育」と堅苦しくするよりも、作品を見ることや美術館という場所を楽しむことを一番の目的としています。

美術館におけるワークシートは利用者が作品の鑑賞を深めるための補助と考えています。そして作品の写真図版と解説を載せた鑑賞(作品)カードも補助の一つですが、基本的に作品カードが作品理解を目的とした情報の一方的な伝達であるのに対して、ワークシートには利用者の自発的な動作や作業が必要となります。この動作や作業を、鑑賞する際の作品へのアプローチ方法の一つとして提示しています。東洋の古美術、特に陶磁器などの工芸品は難しくつまらない、というイメージが先行しがちですが、作品の造形的な美しさや作品から読みとれることなど、作品の魅力を引き出して伝えられるようなワークシートが理想ではないかと考えます。

今回は主に小学校中・高学年を対象とした内容で、それぞれのワークシートに展示作品を一～二点取り上げています。取り上げた作品の全図または部分図を表紙に載せ、実際はどんな作品か想像しながら探すところから始めます。

図１は「赤絵仙姑文壺」(元時代後期)を取り上げ、何が描かれているのかを考える内容になっており、最後に現在の解釈をごく簡単に紹介しています。西王母と見られる人物が描かれていますが、描かれているモチーフについて正確な知識を持っていなくても、作品をよく見ることで自分なりの想像がふくらみ、作品との距離も近付くのではないでしょうか。

図２は二作品の比較を行う内容で、「青磁雕花蓮華文瓶」(北宋時代)と「五彩蓮池魚藻文壺」(清時代）を取り上げています。共に蓮華文があらわされていますが、前者は文様を彫り込み、その表面の凹凸が単色の釉薬に濃淡を生み出して表情を付けています。それに対して後者は多くの色釉を用いて描画しており、全く異なる技法が用いられています。年代差と描写方法の違いを見る好例です。

図３は「青花双魚文大皿」（明時代初期）を使って、構図を楽しむことをねらいとしています。円形の皿に回転文様が内と外に二重に配され、その連続性は文様（魚と花唐草）に込められた「四季有余」の願いが続くことを象徴しているように感じられます。

受付の脇にワークシートを置きましたが、小・中学生の来館者はごく少なく、ほとんど大人の方が手にとっていって下さったようです。これを機に、ご家族で一緒に楽しみに来て下さることを願っています。ワークシートの種類も随時増やしていく予定です。また、学校の団体来館では美術（図工）の授業計画に沿って展開していけるような対応を心がけており、本展観での団体来館の様子については改めて報告致します。身近に感じられる美術館となるように、今後とも様々な試みを行っていきたいと考えています。

（学芸部部員　瀧朝子）

図１（見開き）

図２（表紙）

図３（見開き）

季刊 美のたより №143
平成15年７月11日
発行　大和文華館

Copyright ©2007 The Museum Yamatobunkakan. All Rights Reserved.